プロジェクト概要

里山地域と都市部を結ぶライフスタイル提案型施設として

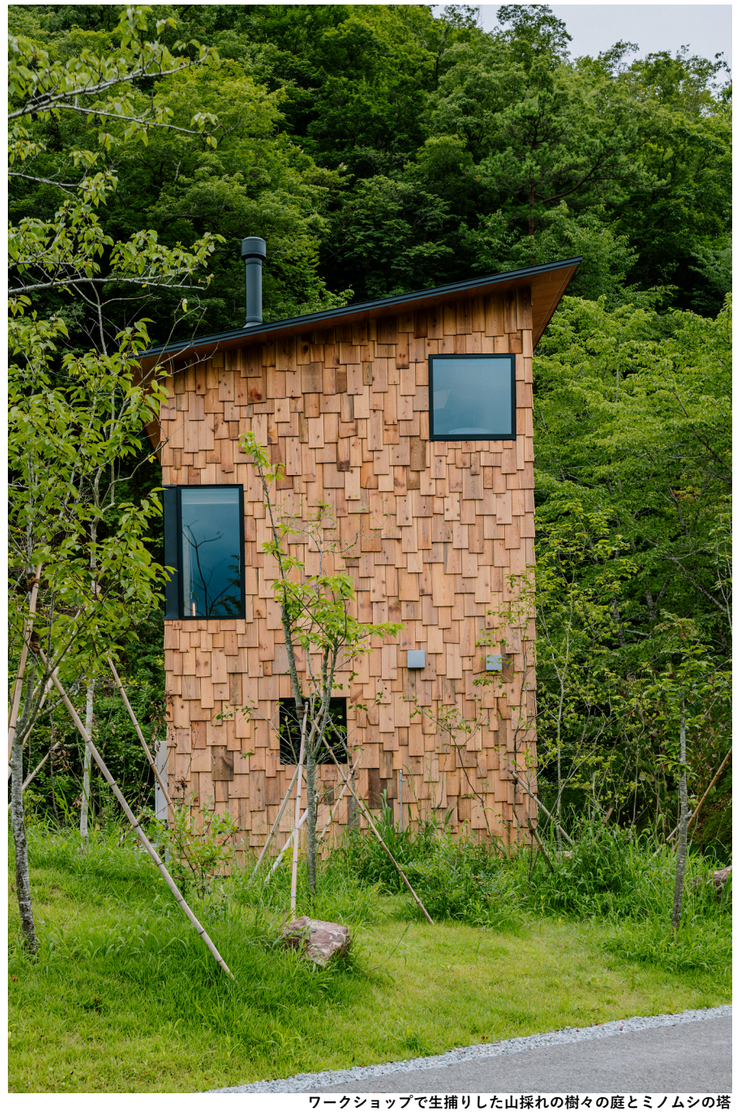
コロナ禍で増加したテレワークやワーケーション、多拠点生活という新たなライフスタイルは、新型コロナが収束に向かうと同時に減少しました。また、同じくキャンプやグランピングといったアウトドアレジャー産業も同じタイミングと理由で利用者数が減少しています。これらは従来のライフスタイルへの回帰、すなわち都市への回帰と捉えることができると考えます。

一方で、**多様な生物との共生や、里山の有機的な循環経済を改めて見直す契機**になりました。

本プロジェクトは都市部と里山にそれぞれ拠点をもつ事業者が、主に都市部に住んでいる人々へ向け、**宿泊やワークショップを通して新たなはたらき方や暮らし方を発見してもらうきっかけづくり**です。

こもりのもりの「洞穴cabin」

こもりのもりの全景

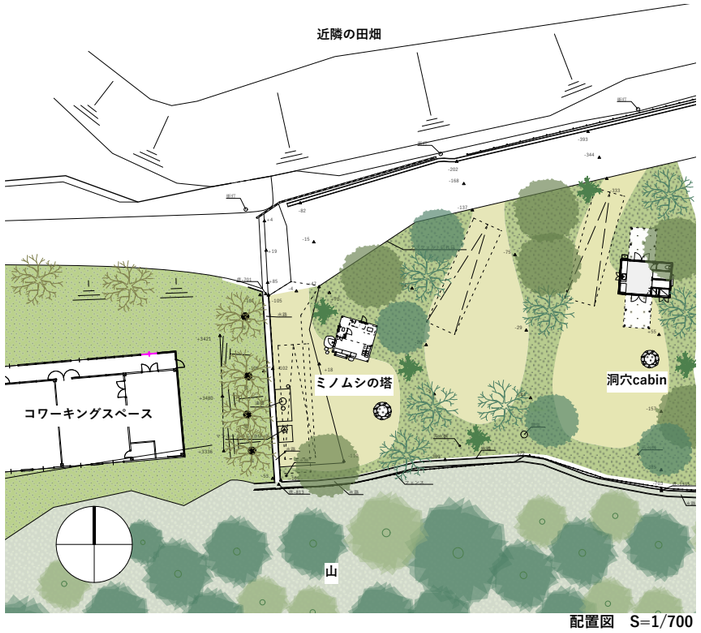


ワークショップで生捕りした山採れの樹々の庭とミノムシの塔

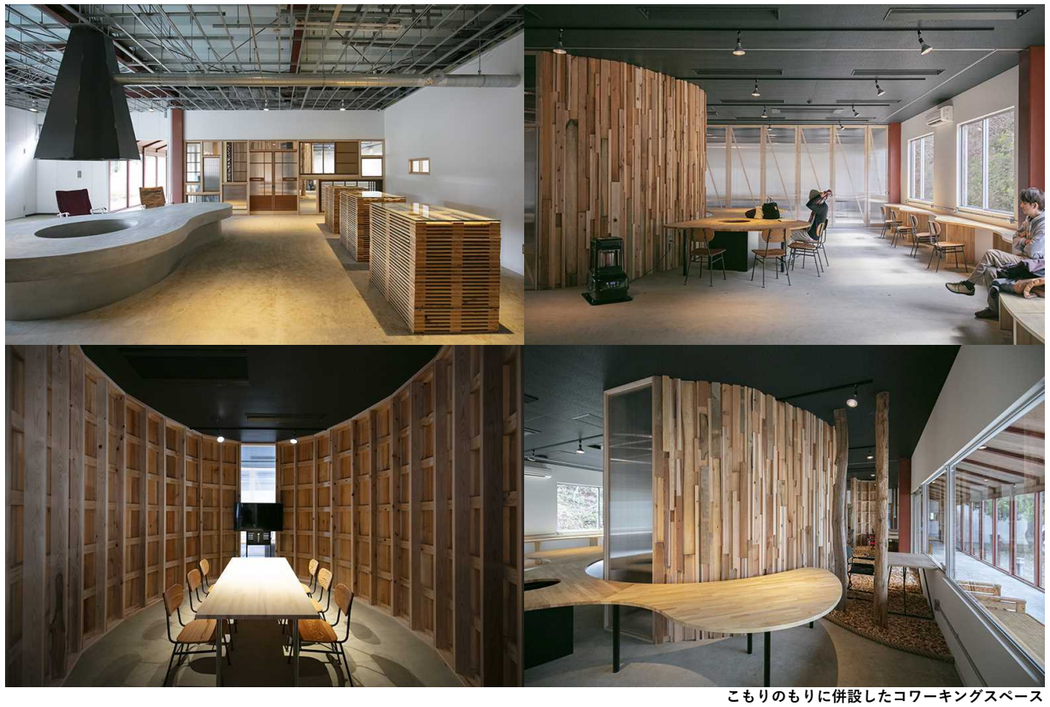
配置計画

コワーキングスペースに併設したアウトドア宿泊施設

コワーキングスペースに併設する形で、それぞれ違う特徴を持ったふたつの宿泊施設「洞穴cabin」と「ミノムシの塔」を新設しました。



配置図　S=1/700



こもりのもりに併設したコワーキングスペース

木材利用について

周辺の山の樹々を間伐して植樹

事業者が所有する近隣の山から庭木として使えそうな樹々を間伐し、植樹しました。また、山での掘り起こしから根廻しまでは事業者・設計者・施工者やその家族や関係者などでワークショップ形式で行い、学びながら進めていきました。なお、通常の外構工事は建設工事のあとで行われることが多いと思いますが、本プロジェクトでは、山採れの樹々が敏感であることなどが考慮され、植樹作業や外構作業が建設工事と並行しつつ先行して行われました。

木をつかい、木を学び、木をまもる

本プロジェクトでは、地域の木材をさまざまな角度から捉え利用し、専門領域を超えて学ぶことで、木への理解が深まりました。今後はそれらをより多くの利用者の方々へ発信していくことを目標としています。

計画地の近隣の山での間伐ワークショップ

ワークショップで生捕りした山採れの樹々の庭と洞穴cabin

木材利用について（洞穴cabin）

地域材を利用した架構や家具

木造の架構には出来る限り**近隣県産材の杉**を利用しました。内部と外部、その先にあるランドスケープを隔てなく一体的な空間として体感してもらえるよう、小屋梁を細い鋼材に変換するなど、木造の架構そのものをより美しいものとして見せるよう工夫しました。

内部の造作材も地域材の杉を利用し、左官壁のやわらかい陰影を際立たせる杉らしいやさしいエッジを生んでいます。

テーブルは、地域で**長年ストックされていたケヤキの耳付きの板材**を極力加工せず利用し、原木の力強さを感じられるようにデザインしました。空間の中心的な位置に配置するテーブルは、様々なアクティビティの器となり、また皆が集う囲炉裏のようなものとして機能することを期待して設置されています。

地域のデッドストック材を収集している材料屋での調査

木材利用について（ミノムシの塔）

地域の廃材を利用した外壁

木造の架構に地域産材を利用するだけでなく、**地域の廃材を既存ストックとして積極的にアップサイクルできないかとプロジェクトの計画段階からリサーチ**し、工務店の請負った別の現場の廃材などを掻き集めて外壁や棚などに利用しました。なお、この材料はコワーキングスペースでも積極的に仕上材として利用しています。

耳付きの材料や幅が不揃いの材料など、規格材とは異なり1枚1枚に表情がある為、ある程度の規則性を持たせても生き生きとした表情が生まれます。

なお、ミノムシの塔の内部では一転して規格材をメインで使用し、外部の表情の豊かさが際立つようにデザインしています。

解体する家屋から生捕りした廃材（松の板材）

キッチン

リビング的な空間からつながる軒下空間

コンパクトで落ち着く就寝スペース

1階の調理・食事スペース

2階の就寝スペースとボルダリング

ロフトスペース

内部と外部が一体的につながる空間

地域の廃材を利用したウッドシェイク外壁